

## 平成14年度研究報告書

# 臨床動作法の被虐待児への適用に関する研究

研究代表者	藤岡 孝志	日本社会事業大学
共同研究者	山下 聖隆	横浜いずみ学園
	今村 亨史	横浜いずみ学園
	上神谷周子	元横浜いずみ学園
	高田 治	横浜いずみ学園

社会福祉法人 横浜博明会

### 子どもの虹 情報研修センター

(日本虐待・思春期問題情報研修センター)

平成14年度研究報告書

臨床動作法の被虐待児への適用に関する研究

子どもの虹情報研修センター

# 身体運動による被虐待児へのグループアプローチ

## — 臨床動作法の視点を助けとして —

本論文は、情緒障害児短期治療施設（以下 A 施設）において、被虐待児を対象として、身体運動による治療的アプローチを試みたグループワークについての研究報告である。

### はじめに

被虐待児の特徴として、人との信頼関係の築けなさ、外界に対する恐怖感、独占欲の強さ、被害感の強さ等があげられる（四方・増沢 1999）。しかし、被虐待児の特徴は心理面、対人関係面だけにとどまらない。被虐待児と接していると、よく転ぶ、手から物をすぐ落とす、「気をつけ」の姿勢がとれない、なわとびが飛べない、よく人や物にぶつかるなど、身体面、運動面における様々な不器用さも目立つ。運動機能、感覚機能が育っていない、または統合されていないようで、それが心理面、対人関係面の問題と相まって、彼らの成長をはばみ生きにくくさせている。

本研究の対象となるグループワークは、入所施設（以下 A 施設）<sup>i</sup>において上述のような特徴をもつ子ども達の機能改善を目的として始められた。

運動機能、感覚機能改善のために身体に働きかけることは、機能改善という変化を引き起こすだけにはとどまらない。援助法として様々な身体を通じたアプローチがあるが、その多くは身体の機能改善と共に、日常生活における構えや人格の発達をも視野に入れている。例えば、臨床心理学の動作療法では「課題通りの動作をしようと努力するプロセスの中で得られる様々な体験が、当人にとって必要・有効・有用な治療体験として経験されることが真の狙いである」（成瀬 2000）とされている。また、障害児教育のムーブメント活動でも「自己の身体を動かすことにより、諸行動を適切に行うために必要な要素としての感覚・運動技能の修得と身体意識の形成を図りながら、心理的諸機能を高め、究極的に子どもの『健康と幸福感』の達成をねらいとする」（小口、小林、高山 1981）とされている。

本グループワークも、当初は身体運動の機能改善を主目的としていたが、回を重ねるごとに、心理面・情緒面の発達や生活面での変化が目的の中心になっていった。

本研究では、上述の動作療法の視点到多くをよっている。その子にあった運動課題を設定し、子どもにとって課題がどのような意味を持つのか、その課題に取り組む中で子どもがどのような体験をするのかという視点を導きとすることで、グループワークがより治療的な場になることを目指した。

本稿ではグループワークでの個々の子どもの変化、子ども達の動きについて得られた視点、グループ

---

i 本研究の対象となるグループワークは、A 施設において以前よりあった「グループワーク・トレーニング B」を継続発展させたものである。A 施設では、以前より、「トレーニング B」というグループワークを行っていた。そのグループでは身体を動かすのがあまり得意でない小学生を対象に、楽しく身体を動かしながら、基本的な運動機能の改善を目指していた。プログラムはリズム体操、ストレッチ、感覚刺激的な運動（セラピーボール、ローラーボード、ミニトランポリン、戸外で斜面や枯れ葉の上など不整地を歩くなど）を組み合わせていた。ちなみにここ最近 2 年間の参加児童は全員被虐待児であった。

「グループワーク トレーニング」について論じたものとしては 増沢高 下木猛史 竹下洋子 岡部美穂「グループワークにおける治療的側面—グループワーク・トレーニングの変遷を通して—」『心理治療と治療教育 情緒障害児短期治療施設研究紀要 第 4 号』1992 がある。

の変化の3点について論じる。

## 研究方法

### グループの構造

身体の動きがぎこちないA施設入所中の子ども達4人で、一つのグループを作った。この実験的グループを「のびのびグループ」（以下「のびのび」と略す。）と名付け、施設職員がグループを運営し、外部の臨床動作法のスーパーバイザー有資格者（以下SVと略す）が子どもの動き、グループの進め方、メニューの組み方などについて助言を行った。

「のびのび」は毎月一回、A施設内の分級の体育館で、45分間行った。学校の長期休暇中は行わず、施設内の行事等の都合により休止した月もあり、2002年5月から2003年3月まで計7回行った。

参加児童4名に対し、スタッフ（SVも含め）5名参加して、個々の子どもの身体動作をしっかりと補助、観察できるようにした。

職員5名の役割はそれぞれリーダー1名、補助2名、観察2名（ビデオ1名、記録1名）である。リーダーは毎回メニューを考え、グループの進行役をつとめた。補助は積極的に子どもの側に入り、個々の子どもに補助、助言をした。記録にはビデオも用い、終了後撮影したビデオを見ながら、子ども達の動きの特徴や次回のプログラムについて検討を重ねた。撮影については子ども達にあらかじめ了承を得た。

### 参加児童について（在園年数は2002年5月開始時のもの）。

「のびのび」に参加した4名を簡単に紹介したい。「のびのび」に入るきっかけとなった動きの特徴や、日常生活で気になる様子について述べる。

#### Aさん（小5・女子 在園3年3ヶ月）

身体を動かすことが好きで、体育の先生になりたいと希望を抱いている。しかし、ダンスでは、リズムと全く合っていないのに平気で踊っていることが気になった。日常生活では、自分ができないこと、不安なことに直面すると、文句を言って他人のせいにすることが多い。集団遊びではルールにこだわり、ルール違反をした子に文句を言ってしまい、遊びに身をゆだねることができない。

#### Bさん（小4・女子 在園2年2ヶ月）

Bさんは日常生活でもお尻だけぽこっと突き出した姿勢が特徴的だった。食事中に足をぶらぶらさせて落ち着かない、一度興奮しだすと注意されてもとまらないなどの様子が見られた。注意されると、まるで注意した側が悪いかのようにむっとしたり、ふてくされたりすることも多かった。友達に対しては自分の優位を主張したいのか、誰かが「昨日こんなことしたよ」と言うのを聞くと、「私はこんなことをしたことがある」と負けまいとすぐに自慢してしまう。一方で、職員と一対一の関係を求める気持ちは出てきており、そういう場面ではやわらかく落ち着いた様子ですごしている。

#### C君（小5・男子 在園3年4ヶ月）

C君は日常生活でがさつな動きが多かった。例えば、前を見ずに走って友達と正面衝突する、食事中

台拭きを取ろうとして、それに気を取られているうちに、ひじでコップを倒し、お茶をこぼすなどがよく見られた。サッカーでも一人力いっぱいシュートを打つだけで、他の子にパスはできない。また、人と適切な距離がとれず、職員にべたべたと寄っていく。集団活動ではまるでわざとかわされるほど、全体への声かけに反応できず、一人自分勝手な行動をして集団から外れてしまう。

D君（小3・男子 在園1年7ヶ月）

D君は当時の学園の中で一番幼い子であった。体格はまるで3歳児をそのまま大きくしたかのようであり、廊下をばたばたと落ち着きなく走り、そして突然足がからまり、ぱたりと転ぶことが多かった。また、心理的にも大変幼く、思ったように工作ができないなど些細なことでごね、それがなかなか収まらず、ひどいパニックに至ることもあった。また、中学生の無断外泊などで、施設全体がばたばたした雰囲気になると、ちょっとしたきっかけでパニックになった。他児とプロレスごっこで遊んでいるとすぐに興奮して止まらない、などのことが見られた。

参加した子ども達は、幼少期から心理的、身体的虐待を受けてきた共通点がある。また、4人とも小学1年生、2年生という年齢で入園しており、学園の集団の中で最年少だった時期があり、相対的に職員から手をかけられ、かわいがられてきたのも特徴である。

### プログラムについて

運動課題の選定については、これまでに行なっていた運動課題に加えて、運動遊びを通して他の諸機能の発達も促すという考えに基づく障害児教育の分野のムーブメント教育（小林 1993）も参考にした。施設外のスタッフ（SV）が入る初めてのグループになることを意識して、子ども達に馴染みがあるもの、単純で楽しめるもので、なおかつ子どもの動きが分かりやすいものを中心にメニューを組んだ。一つ一つの運動課題の内容、そのねらいについては資料1を参照して欲しい。

## 経過

### のびのびグループの毎回ごとの様子

以下にグループでの子どもの主な様子、反省会で話し合われたことを、一回ごと簡単にまとめた。毎回のプログラムと子どもの様子の詳細については、巻末の資料2を参照して欲しい。

#### # 1

##### プログラム

準備体操→スティック体操→毛布ゆらんこ→サーキットトレーニング→クールダウン

##### グループの様子

初回である。Aさん、Bさんは緊張しているが、C君、D君は日常の姿とそれほど変わらない様子。人数も4人でこじんまりした印象だが、「毛布ゆらんこ」ではC君、D君が興奮しがち、クールダウンでも静けさに耐えられず、軽く顔をはたき合ってしまう。運動課題への拒否はなく、子どもにとっ

ても、職員にとっても無難に終わった印象がある。

## 反省会

「毛布ゆらんこ」など感覚を直接刺激するものは、このメンバーには刺激が強すぎるのかもしれない。運動課題の組み立てとしては小林（1993）の分類を参照に、身体の軸や姿勢の安定を中心にしたもの（スティック体操）、感覚を刺激することを中心としたもの（毛布ゆらんこ）、身体を移動、操作しながら安定することを目指すもの（サーキットトレーニング）からそれぞれ一つの課題を選ぶやり方を維持することにした。また反省会で見てきた子ども達の動きをフィードバックできるよう、なるべく同じ課題を継続することにした。また一つの課題での動きが、他の課題でも生かされるようにプログラム全体の配置を工夫することにした。

## # 2

### プログラム

準備体操→スティック体操→ローラーボード→サーキットトレーニング→クールダウン

### グループの様子

D君が不参加のため、3名でのグループ。「スティック体操」では木のイメージを使った身体のばし子ども達（Aさん、C君）にはまった。特にC君は身体を伸ばすことの気持ちよさを味わっていた。その一方で「サーキットトレーニング」のような動く課題は、C君だけ調子外れな勢いがみられた。Bさんは練習として、ゆっくり課題をやってもらう時は、不安そうな表情であるのに、リズムに乗り始めると表情もよくなり、うまくできるのが印象的であった。

## 反省会

C君の自分の体を伸ばしたりバランスをとったりする時の動きのよさ、はまりのよさと、平均台から転ぶなどのコントロールの悪さの差が際立った。C君は日常生活でも、集団全体に話しかけられても、一人だけ反応できない。サッカーでは力いっぱいシュートするだけで、相手にパスできない。それらを合わせて考えると、環境が彼に合わせて何か返してくれるという体験が極端に乏しく、世界自体を呼応的なものとして生きていないと考えられた。まずはゆっくり周囲を見て、外の世界に合わせることを目標とした。

Bさんは自分の身体を伸ばすのは苦手で、補助もしづらい、ゆっくり動くよりも早く動く方が得意、ということが特徴として表れた。生活場面でも食事中足をぶらぶらさせなければいけないことなどを考え合わせると、自分の身体や感覚に向き合うような課題が苦手らしい。課題に対しては拒否的ではなく、取り組もうとはしているので、しばらく様子を見ることにした。

子ども達各々の課題が明確に見えたので、次回以降は「サーキットトレーニング」をゆっくり慎重に動く運動課題とすばやく早く動く運動課題に分け、実施するなどの工夫をすることにした。

## # 3

### プログラム

準備体操→スティック体操→セラピーボール乗り→スティックバランス→サーキットトレーニング→クールダウン

## グループの様子

再び4人のグループになったが、「サーキットトレーニング」を中心に、活気が乏しく、生き生きとした感じが薄かった。リーダーとしてはうまくいかなかった感覚が残った。「サーキットトレーニング」の準備の間をもたせるための「スティックバランス」が子ども達に好評だったが、誰一人としてうまくできない。新しい運動課題「セラピーボール乗り」も難しい課題だが、子どもたちは興味をもって取り組んでいた。

## 反省会

上記したが、楽しい雰囲気や生き生きとした感じが減った気がした。個々の子ども達の課題が見えたため、こちらがその課題にこだわりすぎて、難しい課題に向き合わされていると子どもが感じたのかもしれない。また、身体の動きを止める課題が多すぎたのも、一つの原因かもしれない。

しっかり立つことを意識させるために、床を踏みしめるジャンプをとり入れた。しかし、そこでは床を叩くように子ども達が飛んでしまっているため、床にしっかり立つことより、床からはねる動きに焦点があたってしまう。むしろ、立っている中で片足ずつ、または前後左右に体重を乗せた方が、しっかり立つことを意識するにはよいと、SVより助言があった。

時間調整にいった「スティックバランス」だが、あまりにもできなかったことが印象的であった。バランス感覚だけの問題ではなく、自分と環境の間にインタラクションが生じると、自分がどう動いたらよいか分からないという問題であろう。「セラピーボール乗り」もボールからの働きかけがあり、子どもが環境をどう受け止め、どう働きかけるかというインタラクションする力が必要とされる課題である。子ども達は楽しんでいるが、課題自体は高度なので、試す時間を長めにとり、ボールの動く方向をある程度固定して課題を単純にすることが必要だろう、と話し合われた。

## # 4

### プログラム

準備体操→スティック体操→毛布ロデオ→セラピーボール乗り→クールダウン

### グループの様子

# 3から期間があいたが、前回と連続している感じがある。子ども達も同じような思いがあるのか、戸惑いはない。しかし、リーダーの指示に対しては集中できていない感じはある。皆でいっせに行う課題（「サーキットトレーニング」）が減り、一人ずつ順番に行う課題（「セラピーボール乗り」「毛布ロデオ」）が中心となった。「毛布ロデオ」は子ども達に好評だった。

### 反省会

D君の特徴として、動きを止められないことが明らかになった。D君に対してはジタバタしない状態でじっとして、崩れかけるところでサポートしていく方針になった。子ども達もだいぶ慣れてきたので、SVが直接補助しても大丈夫だろうと話し合った。

## # 5

### プログラム

準備体操→バランスボード→輪っか飛び→毛布ロデオ→セラピーボール乗り→クールダウン

## グループの様子

こじんまりした雰囲気。全体的に指示も入りやすい。子どもたちが課題に対して、積極的に働きかけようとする芽がでてきた。課題に取り組んでいる他の子どもの様子に注目し、自分のやり方を他の子に教え、共有しようとするなど、安心感のある集団として、まとまりが生まれてきた。課題としては「バランスボード」を新しく導入した。

## 反省会

それぞれの子どもたちの、苦手な課題への対処の仕方が見えてきた。また、子ども達が自分の対処のしかたをみんなに教え合うなど、グループとしてのまとまりがでてきた。

具体的に補助をつけるポイントを絞り（D君のアキレス腱、Bさんのスティック体操）、こうしたらという提案という形での補助も始めてみる。

S Vからは、「バランスボード」について、もう少し時間をかけて試さないと重心の感覚が分からないと指摘があった。

## # 6

### プログラム

準備体操→バランスボード→毛布ロデオ→セラピーボール乗り→クールダウン

### グループの様子

前回同様、自分の取り組みを他のメンバーと共有しようとする動きはあり、集団としてのまとまりは強い。課題に対しても、能動的に働きかけようとするが、Aさん、Bさんの課題へ集中して取り組む度合いの高さに比べると、C君、D君の課題への集中が相対的に低く、差が生まれてきている。

## 反省会

バランスボードの高さを高くしたのが良かったのか、皆楽しんでバランス感覚を試していた。SVからは、バランスが崩れるかどうかのところで耐えることが大事なのでもう少し止まってから時間をとった方が良いと助言がある。

同じ課題を繰り返すことで子ども達自身が調整していく過程がよく見える。他人にすすめられてできないのは失敗感を生むけれども、自分でやってできないのは試行錯誤の過程の一部であり、失敗と感じないのかもしれない。

課題のレベルが高くなってきたのか、個々の子どもの取り組みに差がでてきた。Aさん、Bさんにはよいが、C君、D君にはきつい感じ。C君は課題に向き合えずごまかすことが増えた。D君は課題の刺激に負けた。

## # 7

### プログラム

準備体操→バランスボード→毛布ロデオ→セラピーボール乗り→クールダウン

### グループの様子

この回については後に詳しく論じているので、ここでは省略する。

## 反省会

ここ数回まとまりを見せていたグループが崩れたように感じた。しかし、ビデオを見直してみると、C君以外は課題に対して真剣に取り組んでいる。これまでは子どもたちが課題に合わせて動いてきた。課題を自分のものにした子ども達の能動性のある動きや雰囲気が、グループが崩れたという感じを与えた原因のように考えられた。

## 考 察

### 1 のびのびグループの中で見えた個人の成長

「のびのび」の中で子どもたちが見せる身体運動、動作の特徴は、生活場面での子ども達のあり方と密接に関連し、重なりあっていた。身体の運動・動作に注目して運動課題を工夫し、回を重ねるごとに、子ども達の動きが実際に変わっていった。その身体動作の変化と共にその子自身が変わること大きな可能性を感じずにはいられなかった。

ここでは「のびのび」での成長・変化を、まずは個々の子どもに焦点をあてて考察する。子ども達の課題が見えてくるまでの前期と、その課題に向き合っていく過程の後期に分け、記述してみたい。

#### Aさん

Aさんを「のびのび」のメンバーに選んだのは、彼女が身体を動かすことが好きであるにもかかわらず、ダンスを踊るとリズムと全く合わないことが気になったからである。

「のびのび」以前のグループワークへの参加の様子は、準備をかがいしく手伝い、課題に対しては痛々しいほど一所懸命であった。しかし、ゲーム性の強いメニューになると、日常での彼女の姿が表われ、些細なルール違反などにこだわり、集団から外れてしまう。

#### ・前 期

「のびのび」でも全ての課題を無難にこなし、当初はあまり注目されなかった。しかし、#3の準備の時間に補助職員が始めた「スティックバランス」で注目された。揺れるスティックに対して自分の身体を動かしてバランスをとろうとせずに、スティックが手のひらから倒れだすと、もう片方の手でさっととり、やめてしまう。そして再びじっと姿勢を正し、手のひらにそっとスティックを乗せ、同じことを繰り返す。

#3の「セラピーボール乗り」でも同じようなことが見られた。ボールに四つんばいでうまく乗った後は自分の身体をほとんど動かさない。一度バランスが崩れ始めても、そのまま何も動こうとせず、棒のようにゴロリと落ちてしまった。

これらのことから、Aさんはたえず変わる環境に対して能動的に自分で働きかけることができない、またはそのような能動性を発揮できない環境に育ってきたと考えられた。彼女の文句は、周囲を責めたり、周囲を動かしたりすることで、自分の動けなさにバランスをとるための対処方法であろう。また、ルールにこだわって遊びに身を任せられないのは、確実なルールにしがみつ়くことで、自分が不確実な環境で動くことを回避していると考えられた。

#### ・後 期

環境の変化に対して、能動的に関わろうとする力をどう引き出すかがAさんには重要であった。「セラピーボール乗り」も自分とボールとの相互作用を引き出す課題であるが、よりAさんのあり方に焦点

をあてて考え出された運動課題が「毛布ロデオ」である。身をゆだねることが得意なAさんにとって、「毛布ゆらんこ」は比較的得意な課題であり、毛布はなじみの素材である。また、4人の大人に囲まれていることによる安心感の中で、環境に能動的に働きかけるようになって欲しいと考えた。

#4の「毛布ロデオ」では、がんばって踏ん張ろうという気は見えるのだが、一度ひっくり返ったり、横になったりしてしまうと、リカバリーすることができず、そのままなされるがままになっていた。他の3人と比べると、明らかに踏ん張る姿勢が弱かった。

#5の「毛布ロデオ」ではゆらす時間を5秒・10秒・10秒に区切った。耐える時間に見通しをもてるようにすることと、Aさんがリカバリーをするための間をとることを目的にした変更であった。実際に始まると、踏ん張る気があるのかなと思える程すぐに倒れてしまう。しかし、いつものような文句は言わず、インターバルには体勢を立て直していた。#5の「セラピーボール乗り」も身体をボールの上で棒のようにしており、自分で働きかけることはなく、お任せの状態のままに見えた。しかし、他の子どもが乗っている時に「腹に力をいれるといいよ」とアドバイスをしており、環境に働きかけていないのではなく、ボールと自分の双方をなるべく動かさないように、消極的ではあるものの環境に働きかけをしていたことが分かった。

#6ではそれぞれの課題に対して、どうしたらうまくいくのかあらかじめ考えてきていた。「毛布ロデオ」では一人の職員の動きに注目することで、ゆさぶりに耐えることを発明した。また、「セラピーボール乗り」では「どうしたらうまく乗れるんだろう」とやる前に職員と話し合う姿があるなど、自分のおかれた状況に対して、文句を言うという方法ではなく、前向きに対処しようという構えが確実に生まれていた。このようなAさんの姿は日常場面では見たことがなく、びっくりするとともにうれしい出来事であった。

#7の「毛布ロデオ」では、何度かひっくりかえされるが、笑顔で体勢を立て直そうとしていた。「セラピーボール乗り」でも、空気が入り、跳ねがよくなったセラピーボールから何度も落ちるのだが、これまでとは異なり、落ちそうになると必死に耐える様子がみられた。まだまだ不器用ではあるが、環境に対して能動的に、しかも楽しんで働きかけていく力が確実に芽生えたように感じた。

## Bさん

Bさんは日常生活でもお尻だけぽこっと突き出た姿勢が特徴的だった。食事中に足をぶらぶらさせて落ち着かない、注意されてもとまらないなどの様子が見られた。一方で、職員と一对一の場面ではやわらかく落ち着いた様子で過ごしている。

### ・前期

「のびのび」では、外部のスタッフが参加することに一番警戒した様子を見せていた。参加も担当の先生に励まされようやくであった。#1の「毛布ゆらんこ」でも身体を硬くして、ゆだねる感じにはならない。

#2の「スティック体操」ではすぐに「これきれい」と言う。身体を伸ばしきることができず、補助して伸ばそうとしても、伸ばしきる寸前に身体の軸をゆるめるなど、拒否される感じがかった。「サーキットトレーニング」では、それぞれの運動課題を練習としてゆっくり試す時には表情も不安げで、うまくできないのに、本番でリズムに乗ってしまえば、表情も動きもよくなっていた。

くねくねしてじっと座ってられない不登校の子に、あぐら座位で背中をまっすぐにした姿勢をとらせたところ、自分の中から何かが湧き上がりあふれるように「あっ」と声を上げてしまうことがあったと、SVが過去の経験を語った。その不登校の子と同様に、身体の動きをとめること、身体をゆっくり伸ばすことはBさんの中の不安や不快な感覚をはっきり意識させることで、自己感覚への直面体験をかなり伴っているようである。

「これ（スティック体操）嫌い」とか、片足立ちでも「こっちは得意」と自分の身体の感覚にはかなり敏感であり、外部の人がグループワークに参加することに一番警戒心をもったのもBさんであった。食事中足をぶらぶらさせるのも、テーブルに座るという固定され、逃げられない状況で、内から湧き上がる不安な気持ちに向き合わないための本人なりの対処かもしれない。「スティック体操」で身体がまっすぐ伸ばせないのも、どこかで自分の中にぐにゃぐにゃした部分を作って、防衛しないと安心できないのだろう。同様に、課題にゆっくり取り組むことも、課題に向かう自分自身を強く意識してしまい、不安が大きくなるようだ。Bさんの出っ尻はまさに自分の不安に「腰がひけた」状態を表しているようだった。

しかし、課題を拒否することはなく、本人なりに課題に向かっていた。そのため、課題の達成をすぐに求めるより、課題に向かう過程を大事にしていこうと方針をたてた。

#### ・後 期

Bさんに対しては、自分の身体に注意を向け、自分の身体の感覚に向き合うことが目標になった。しかし、結果を求めすぎず安心感に包まれたなかで、課題に挑戦していく過程を援助することにした。

#4の「スティック体操」では自分の重心を知るために、スティックなしで前後左右に身体を少し傾けることを試してみた。すると、Bさんはこちらの意図とは異なり、真っ先に補助している職員に向かって身体をあずけてきた。大変楽しそうで、その際には腰がしっかり入り、でっ尻にはならない。対照的に、「スティック体操」で上に身体を伸ばす際には、伸ばしきる前に腰がぐにゃと崩れ、出っ尻の姿勢になってしまう。自分から積極的に働きかける際には、きれいな姿勢だが、外から働きかけられる力が強くなると、出っ尻の姿勢で防衛するようだ。「毛布ロデオ」では一方で他人に任せつつも、自分でも持ちこたえるところがBさんには合っているのか、大変楽しそうであった。

これまでは自分の苦手な課題になると、しかめっ面をしていたが、この回からは自分の得意な課題、苦手な課題に関係なく笑顔を見せ、課題に取り組んでいった。「のびのび」で、自分が何かされるのではないかという不安感を抱いていたが、それは払拭され、安心感のある場になったように思えた。

#5の「毛布ロデオ」は頭を毛布に押しつけて前かがみになって耐え、自分なりの対処方法を見つけていた。また、この時はお尻がでて、背中をそらしているいつもの姿勢とは全く逆であり、きれいな姿勢になっていた。

#6では、#5の「毛布ロデオ」での変化を受けて、苦手な「バランスボード」でも補助を試みることを試みた。しかし、お尻が出っ張ったままの状態であまりバランスをとっており、いわゆる「正しい姿勢」への補助はしにくく、無理な働きかけはしなかった。「セラピーボール乗り」は自分でボールを転がしながらうまく進み、一番上手であった。このころから苦手な課題も含めてすべての課題に対して集中を見せ、落ち着いた様子で参加している。

#7の「毛布ロデオ」では毛布の揺れに合わせて、トランポリンのように自分で飛び、「セラピーボー

ル乗り」も横向きで挑戦、〈まっすぐにむいてやってみて〉と提案すると、「難しいこというね」と言いつつ、自分と環境を調整しながら、一生懸命課題に取り組み、彼女が自発的に、積極的にかかわる運動課題がどんどん増えていった。

ずっと出っ尻の姿勢が崩せなかった「バランスボード」もいつの間にかでっ尻が目立たなくなっていた。バランスボードを前に倒して、8秒間耐えた後、〈ボードなしで立ってみて。しっかり安定して立ってる感じしない?〉と聞くと、しばらくじっとした後、「ほんとだ」とびっくりしたように言った。強い不安を感じずに、自分の身体の変化を味わえ、彼女の中で大きな変化があったように感じられた。

## C君

C君は日常生活でのがさつな動きが目立った。集団場面では、全体への声かけに反応できず、一人自分勝手な行動をして集団から外れてしまう。サッカーでも一人力いっぱいシュートを打つだけで、他の子にパスはできない。

### ・前期

「のびのび」では日常生活の姿がそのまま表われた。#1からマットの準備中にその上に乗って跳んでしまい、周囲の状況にはお構いなし。「毛布ゆらんこ」もこちらの指示は関係なく、ただ暴れるだけになる。#2の「サーキットトレーニング」では、横歩きでと指示したにもかかわらず、平均台に正面から突っ込んで、勢い余って派手に転ぶ。その一方、#2の「スティック体操」で、木のイメージを用いた、身体伸ばしはしっかりと伸びきり、本人も気持ちよかったようで、リーダーのところをわざわざ「もっとのぼして」とよって来た。身体をしっかりと伸ばしたあとは、左右に身体を曲げても軸がしっかりし、足もとも安定して地面にしっかり立っていた。

自分を環境に合わせていく意志が見られないのは、これまでC君が生きてきた中で環境が彼に何かを返してくれるという経験が乏しかったと考えられた。自分の働きかけが、環境からなんの反応も受けなければ、環境へ働きかける意志や、力は生まれまいだろう。幸いにも自分の身体についての快・不快の感覚はしっかりしているので、この感覚を大事に、周囲をしっかり見て、外の世界に合わせるとうまくできるという成功体験をつみ重ねてもらおうことを目指した。

### ・後期

#3の「スティック体操」ではゆっくりきれいに立ち上がり、足もしっかり地面をつかんでいた。本人も満足そうで、非常に落ち着いて取り組むことができた。テンポよく軽快に動くことを目指した「サーキットトレーニングうさぎ組」では、それまでのがさつな動きのままだった。一方、周囲を見てしっかり確実に動くことを目指した「サーキットトレーニングかめ組」では他の子が課題に楽しく向かえないなか、信号フープもとまるどころできちんととまれ、前回のがさつな動きとはうって変わって、丁寧な動きができた。職員のアドバイスも素直に聞き入れ、前回派手に落ちた平均台も、最初は慎重にゆっくり行い、途中からコツをつかみ、うまくなった。きちんと教えてあげれば、身体を動かすセンスはよく、覚えがはやい。

#4以降も自分の身体に向き合って動かす課題に対しては集中していた。#4の「スティック体操」、#5から#7の「バランスボード」への取り組みは安定した。「バランスボード」では全く倒れそうになり、ボードを後ろに倒す課題でも、ひざを曲げうまくバランスをとる。他の子には不安定さを楽しめる

課題であるが、彼にとっては物足りないかと思わせるほどだった。また、この時期に一気に伸びた身長も、身体の軸の安定に一役かったようだ。しかし、成長した身体は、「のびのび」の幼い、こじんまりした雰囲気とそぐわない印象も受けた。

「セラピーボール乗り」の初回である#3では止まったボールの上に座って乗り5秒間耐えることを課題にした。その際には、ボールの重心にしっかり乗ることができたが、わざとゆらして落ちてしまう。#4以降はボールにうつぶせになり、ボールを職員が動かすのに合わせてバランスをとるように課題を難しくした。C君はなかなかまっすぐ乗ることができず、左右の感覚があまりない印象を受けた。また、怖さもあるのか身体や筋肉がしなやかでないのもうまく乗れない原因と考えられた。#5では一人だけセラピーボールを腕で引き寄せるように前後に動かして、自分から課題に働きかける姿が見られ、次回が期待された。しかし、#6では、集中してとり組めず、ボールにうまく乗れないとそっと支えのマットに足を引っかけてしまうなど課題に対してごまかすような姿勢が見られた。それは#7でも続き、さらには他の子が課題に取り組んでいるのに、ちょっかいを出そうとして、制止される場面もあった。

後半うまくいかなかった理由はいくつか考えられる。一つには自分を動きのある環境に合わせていく課題は、C君にとってまだ難しすぎたことが考えられる。ようやく環境に対して自分の身体をどう動かせばよいか分かってきたC君に、たえず変化する環境は不安定で、どうにも対処できなかったのだろう。

同時期には並行して行われていた「トレーニングB」にもはまれなくなり、生活場面の中でも一時期影を潜めていた、人へのべたべたしたかかわりや落ち着きのなさが目立っていた。思春期に入って衝動性が高まったことで、こじんまりとした「のびのび」のメニューにはまれなくなったのかもしれない。身体が大きさのわりには、セラピーボールが小さくなってしまったのも原因であるのだろう。

## D君

### ・前期

D君は当時の学園の中で一番幼い子であった。体格はまるで3歳児のようであり、転ぶことが多かった。また、人格的にも大変幼く、些細なことでごね、興奮し、ひどいパニックに至ることもあった。実際#2の前はパニックになり、参加できなかった。また、学園全体の雰囲気に影響されやすく、学園全体がばたばたした雰囲気になると些細なことで暴れた。

「のびのび」では#1の「サーキットトレーニング」からケン・ケン・パのパの両足がそろわない、利き足でしかケンケンできない、平均台でかに歩きができないなどすべての動きがぎこちなかった。動きがぎこちないことは分かるものの、動作の特徴をつかむことはなかなかできなかった。ただ、#1の「毛布ゆらんこ」では笑いが止まらなくなり、#2はパニックになり参加できないなど、刺激の強いグループへの参加は難しいと考えられた。しかし、本人の希望もあって続けることになった。

#3になると「スティック体操」で一つ一つの動作の間がない、つまり、動作の止まる瞬間がないことや、上半身を横に倒すとそのまま身体ごと倒れてしまうなどの特徴が見えてきた。また、「スティックバランス」や「サーキットトレーニング」での平均台など、バランスを崩した時に態勢を立て直そうという気はあるが、じたばたと動きすぎ、リカバリーの動きを妨げていることが分かった。

これらの動作の原因として、静止できないことが考えられた。静止できないことは、自分の身体をコ

ントロールできないことで、自分の身体が自分のものである、もしくは自分自身であるという感覚が弱いことにつながる。周囲の状況に簡単に影響されてパニックになるのも、自分自身が簡単にゆり動かされ混乱した結果であり、自分に対する肯定的な構えがなく、自分と他者、自分と環境との境界が薄いとも考えられた。

#### ・後 期

バランスを失った自分自身を立て直そうという思いはあるが、その方法が周囲の動きと関係なくじたばたとするだけなので、その思いを適切な行動につなげるために、課題をしっかりと見て慎重に動くことを目標にした。また、リーダーの身体の動きを模倣することもできておらず、D君が体の動きを理解していくために、補助をつけ、身体の動かし方を丁寧に教えていく方針をとった。

#3の「サーキットトレーニング・かめ組」でゆっくり確実に課題に向かうことを目指した。例えば、一回止まらなければならない赤のフープでは、止まろうとするが、一度動き出してしまうと身体を止めきれず、勢い余って転ぶことも多かった。#4からは、準備体操やスティック体操のひとつひとつの課題に補助をつけて、身体の動きを覚えてもらうことからはじめた。

#5ではまず、アキレス腱を伸ばす身体の形ができないため、その姿勢を教えることからはじめた。「バランスボード」では重心を傾けて静止した状態で耐える感覚を味わってから、「輪っか飛び」によって動きの中で自分の身体をとめることを目指した。リーダーの声かけに自分の動きを合わせようと必死だが、自分の勢いを止めることができず、前に飛ぶと、そのまま前に進んでしまい、すぐに後ろの輪っかにもどることはできなかった。#6の「バランスボード」も最初のうちは板を傾ける勢いが強すぎて、板を前に倒せば、身体ごと前に倒れるなど、前回と同じ様子が見られたが、補助がつくと、少しずつコツをつかんだのか、集中して課題に取り組んだ。#7の「バランスボード」でようやく、体重を傾けたまま静止することができるようになった。

周りの環境をどうにかしたいという思いについて見てみると、#5の「毛布ロデオ」では毛布をつかんで耐え、他の子と同様に自分なりの工夫をして、課題に向きあった。一方「セラピーボール乗り」ではボールの動きに関係なく、自分勝手にジタバタ暴れて転げ落ちていた。#6の「セラピーボール乗り」の転がるセラピーボールに乗る課題では、前に進む際はリーダー（本児の担当セラピスト）に向かって飛びつくように遊んでしまう。しかし、後ろに動いていく課題では緊張感があるためか、真剣な表情でボールの動きや反応を感じながら動くことができる。#7では「毛布ロデオ」では、起きあがりこぼしのような姿勢で乗り、倒れても反動を利用して体勢を立て直し、最後は毛布の動きに合わせてトランポリンのように飛んでいた。

当初は継続も危ぶまれたD君だが、課題の合間はC君と一緒にふざけてしまっても、課題が始まれば集中できるようになった。

またD君は、幼いためかもしれないが、安心感が強い時は本児のこう動きたいという理想が大きくなる。その結果、現実の自分にできる動きとかけ離れた動きを想像してしまい、指示された課題や、自分の身体や環境からの働きかけを無視してしまうことがみられた。しかし、#7では毛布の揺れに合わせて動くことができるなど、楽しくとも我を忘れずに、集中して環境と対話する芽が生まれつつある。

## 2 視点として見えてきたこと

今回のグループの中で、見えてきた子ども達の動作について、またグループを運営する上で重要な視点をえることができた。以下でそれを述べていきたい。

### 自体操作と対象操作

自体操作とは自分の手を口に持っていき、身体のかゆい部分を手でかくなど、自分の身体をうまく使うことである。また、対象操作は机の上にある鉛筆をとる、相手に向かってボールを投げるといように、外の世界に自分の身体を働きかけてゆくことである。発達的に考えると、人は生まれるとまず指しゃぶりなどによって自分の身体像を形づくり始める。その後、外の物を触ったり、口にいらたり探索行動をして、外の世界と接触していく。人間の成長においては自体操作がまず生じ、その後対象操作が生まれ、加齢と共に両者がお互いに密接に関わりながら発達していくと考えられる。自体操作が未熟であれば、当然それに伴っておこる対象操作も未熟になるはずであり、D君はまさにその状態にあった。

自分の身体をうまく使えるということは、自分の身体を自分のものとして受け止め、自分でコントロールできるということである。自体操作に焦点をあてた運動課題は、自分の身体は自分で動かしているという主動感を得ることやそれができることにより自分を肯定的に受け入れていくことを目的にした。

自体操作については自分の身体をどう動かすかというアプローチ（「スティック体操」）と、自分の身体をどう静止させるかというアプローチ（「バランスボード」）の両面から発達を促した。自体操作に関する運動課題は動きが少なく、ややもすれば楽しさに欠け、動きの多い子ども達にとって難しさや苦しさを感ぜさせない工夫が重要となる。

次に対象操作について詳しく考えたい。「のびのび」の中のAさんとC君の動作をもう一度見直してみると、対象操作は2種類に分ける方が子ども達の姿を理解しやすい。一つ目は子ども達の働きかけによって変化しない対象へ働きかけることであり、二つ目は、子ども達の働きかけに反応し、刻々と変化する対象へ働きかけることである。

C君は自体操作については得意で自信もあるようだが、対象操作になるとどんな課題であっても、周囲の環境の状態を感じられないこともあり、途端に自分をコントロールできなくなる。一方、Aさんは自体操作に大きな問題はなく、「サーキットトレーニング」も無難にこなし、対象操作にも大きな問題はないように当初はみえた。しかし、自分の動きにともなって環境が変化する「スティックバランス」や「セラピーボール乗り」という課題になると、途端に動けなくなってしまった。

この点からメニューを見直してみると「サーキットトレーニング」は環境からの反応は多少あるものの、環境そのものが大きく変わることはなく、自分の身体を動かない対象に向かってどのように動かしてゆけばよいのかという自体操作に近い課題として位置づく。一方、「スティックバランス」や「セラピーボール乗り」は自らの働きかけによって環境も変化し、常に環境からの不確定なフィードバックを受けながら、さらに対象に働きかけてゆくというより高度な課題と位置付けることができた。

しかし、Bさんは自体操作は苦手なのに、対象操作は比較的うまくできる。これは従来の自体操作、対象操作という運動機能の面だけではとらえることができなかった。人生の初期の重要な時期にネグレクトあるいは虐待を受けた被虐待児の特有の発達とも考えられ、今後の検討を有するだろう。自体操作、対象操作という視点がなければ、その視点を超えて考えなければならぬとは分からず、曖昧なままだっ

た可能性が高い。様々な視点をもつことがありのままの現実に近づくためには必要であった。

自体操作、対象操作という視点がはっきりすると、子どもたちの身体動作についての課題もはっきり見えてきた。それと同時にこれまで「トレーニングB」で行っていた運動課題が整理され、それぞれの子どもを持つ課題が明確に見え、課題に向き合う子ども達の様子に合った運動課題を採用できるようになった。

### 繰り返しの意味、過程を支えること

「のびのび」では子どもたちが集中でき、楽しめた運動課題の多くは継続となった。課題の多くを継続したことで、一ヶ月に一回のグループワークにもかかわらず、子どもたちの中には連続性の感覚が生まれたようで、前回と同じ課題を今回はどう取り組んでみようかと工夫する姿がみられた。

一方リーダーは同じことを繰り返すのは大事だが、マンネリになってはつまらないので運動課題を新しくしようかといつも迷っていた。しかし、今振りかえると課題をこまめに変えずよかったと思う。参加している子ども達は幼少期より虐待を受けた子ども達であり、幼いころから次の瞬間にはどうなるかわからないような環境で生きぬいてきている。「のびのび」は十分な安心感につつまれていたが、それでも課題に対して自分なりの関わりをしていくまでには十分な時間が必要だったのだろう。知らない外部のスタッフが入ってくるというだけでかなり警戒をしていた初回のBさんの姿が思い出される。

また、それぞれの運動課題が目指すものと個々の子どもの課題が見えてきたことにより、その子が苦手な課題であれば、励まし、うまくできれば同時に喜ぶなど、その場で子どもの経験・感情に即したフィードバックもできるようになった。子どもに対する肯定的な声かけが増えたことで、グループ自体が呼応的な環境になっていき、そのことが子ども達に安心感を与えるという、良い循環が生じていた。

学校の教科で体育ほど好き嫌いが分かれる教科はない。その理由は、できるできない、得意不得意が、誰から見てもはっきりと分かってしまうことにある。また、体育の目標として課題（マット、鉄棒など）ができるようになることを目指しているので、できなかった時に挫折感や失敗感を強く感じてしまうのだろう。（これはどの教科にも共通であるが）

「のびのび」のもとである「トレーニングB」で印象的な出来事があった。野外の枯れ葉がふかふかともった場所で一人ずつ順番に側転をした際に、リーダーが失敗し思いっきりお尻を打った。すると、それを見た子ども達の雰囲気は急にほっとし、和んだものになった。子ども達の「失敗してはいけない」「失敗したら非難される、はずかしい」という呪縛がどれほど強いかがよく分かる出来事だった。

被虐待児は不安や警戒心が高いという特徴があり、上記のような気持ちは虐待を受けてない子よりも相当強いと考えられる。不安の強い子を対象に「のびのび」のような身体を動かす活動をする際に大事なことは、課題ができるかできないかよりも、課題に取り組んでいく過程自体を支えることだと思う。

もちろん、あまりに不安が強すぎればイメージや音楽を使うなど、不安を適度に和らげていくことが重要となる。例えば、#2の「サーキットトレーニング」でBさんがゆっくり平均台をわたろうとする際には、不安そうな表情でお尻も出っ尻になってしまうのに、「かにさんになるんだよ」と声かけして、手をチョキにさせると、意識が不安な自分からかにさんのイメージに向かうのか、急にうまくできるようになった。音楽は今回のグループでは用いなかったが、音楽のリズムに乗ることで、自分の不安やで

きなさにあまり向き合わずに課題に取り組むことができる。

しかし一方で、身体の動きや姿勢が変化するということは考える以上に大きなことである。幼少から虐待を受けてきた子達の見せる動作や姿勢の特徴は、それまで生きぬく中で必要として身につけてきた姿勢や身体の動きであり、それを「間違っているから」と変えさせることは危険である。葛西(2003)はボディワークの倫理について、たとえ専門家の指摘だったとしても、本人のその時々「理(ただしさ)」(=本人の理にかなっているということ)との兼ね合いの中で自らが選択し決定していくことが必要と述べている。課題ができることのみを目指して、本人の不安をどんどん軽減した結果、ブレイクスルーが起これ「正しい」動きになったとしても、その身体は自分のものとして受け入れられるのであろうか。過程そのものに着目することはその危険への歯止めにもなる。

自分の不安にも眼を向けつつ、自分の意志として新しい動作を選び取っていくことが必要であり、そのようなことが許されない環境に生きてきた被虐待児には特に重要な視点なのであろう。

### 3 グループとしての成長

これまでは子どもたち一人一人の姿に焦点をあててきたが、ここではグループ全体について考えてみたい。最初にも述べたが、「のびのび」はグループとしてではなく、個々人の身体の動作に働きかけることを目指したので、子ども同士の相互作用が起これる運動課題は採用しなかった。しかし、「のびのび」はグループとしても成長していた。

#### グループの成長過程

「のびのび」を始める際に、「のびのび」も「トレーニングB」と一緒であると子ども達には伝えた。しかし、外部のスタッフが入ることやビデオ撮影など初めてのことが多く、Bさんのように警戒心を強く抱く子もいた。職員数が多いこともあって守られている感じがあり、回数を重ねると「ビデオを見たい」という声があがるようになった。自分たちの課題に向かう姿を肯定的に受け取る変化が見られた。後半になると、一人一人順番にやるような「セラピーボール乗り」や「毛布ロデオ」などでは、自分の考えた工夫を惜しみなく他の子にアドバイスしたり、他児を応援したりという姿が見られた。このような姿は日常生活とは全く対照的であった。日常生活では、Bさんは他児が自分の持っているのと同じマンガを買ってきただけで、「ばくられた(=真似された)」とムツとしたり、その子に文句を聞こえよがしに言ったりする。そのような姿ばかり見ていた職員にとって、グループで見せる姿には本当に驚かされ、ほっとするような気持ちになった。

このような流れの中、#6までは職員が肯定的にグループを見ることができた。しかし、#7は多少異なっていた。この回を細かく検討してみたい。

#7は、#6から運動課題は変更せずに臨んだ。変更点は「毛布ロデオ」の3回目は各自が「毛布ロデオ」か「毛布ゆらんこ」を選べるようにしたのと、セラピーボールが転がりやすくなるように空気を入れたのが変化である。リーダーの予想としては最終回ということもあり、これまでの肯定的な雰囲気が続いて、まとまった感じで終わるのだろうと考えていた。

#7では子ども達が体育館に入ってくると、「始めるよ」の声がかかるまで、いつものように跳び箱など体育用具の陰や、体育用具室にかくれ始める。職員にさがして欲しいようである。なぜか一人C君が

奇声をあげ、体育館に響かせてそれを楽しんでいる。「始めるよ」と声をかけてもやめられず、奇声が響き、それに影響されたのか他の子どもも集合するが、肋木に登ってしまうなど、なかなかすっきり始めることができない。リーダーはいつもと違い、戸惑いを感じていた。

整理体操を終えて、ランニングを始めるとC君はわざとリーダーの走る進路をふさぐように走る。リーダーを抜くことがいつもよりも多い気がして、〈ぼくより後ろを走ってね〉と声をかける。「バランスボード」にはみな集中して取り組むことができた。「毛布ロデオ」では一人がやっている時に、待っている子ども達が勝手にマットや、肋木に登ってしまう。一人目のAさんの時に、〈気になると危ないからやめて、他の人の（がんばっているの）を見てあげて〉と注意をする。しかし、3人の様子は変わらず、〈（他の人がやっているの）を見ていて、遊んでいるんだったら、やめるよ〉と思わずきつく注意する。その後の「毛布ロデオ」では毛布から子どもたちがいつもより落ちるので、この場に安心感がなくなっているような不安な気分になる。

次の「セラピーボール乗り」では、前回よりボールに空気を入れたため、なかなか乗ることができず、〈まずゆっくり乗ってごらん〉と声をかけながら進めた。順番を待つ3人はセラピーボールを固定するためのマットの上からみていたが、C君は身を乗り出しセラピーボールの近くによってきて、乗っている子に手を出そうとしたので、危ないと思い注意をした。また、Aさんがボールに乗っている時にちゃかすような、馬鹿にするような言動が見られた。全体を通じて枠から外れてしまう行動がこれまでに多く、けがの心配もあり、それに伴ってこちらの注意する回数も増えてしまった。

終了時リーダーである私は今までの良い集団の雰囲気も崩れてしまったような気がして、がっかりしたし、悲しかった。反省会を始める気にならなかった。しかし、反省会でビデオをみるとどの子ども課題に対しては、集中してかかわっている。では、実際の「のびのび」を進めている間に感じた、拡散したようなざわざわした雰囲気はどう考えればよいのだろうか。

反省会で話題になったことは、子どもたちが課題を自分のものになっているということである。「毛布ロデオ」ではこれまでの揺れに耐えるというだけでなく、耐えられなくなるとその揺れに同調して、その揺れを楽しむことに切り替えていた。毛布から3人の子が落ちたのは（Aさん・Bさん・D君）、毛布から振り落とされたという感覚ではなく、毛布の動きに合わせて自ら飛び跳ねているうちに思わず、外に出てしまったという感覚に近いのかもしれない。

躍動感を運動課題が引き出しているところもあった。「毛布ロデオ」の最後は今まで通りでも、「毛布ゆらんこ」でもいいよという教示をしたが、それは、子ども達に課題に働きかける自由を与えることである。また、空気を多く入れたセラピーボールは落ち着いて乗ることをより難しくし、ボールの上で転がったり、はねたりすることを促進した。

これまで培ってきた安心感によって、一人一人が課題に対して前向きに取り組むようなエネルギーが場にひろがった場合、課題に集中している時は問題ないが、自分が課題に向かっていない時、そのエネルギーは子どもたちにとって、どうにも扱えないものになっている可能性がある。自分の中に満ちてきたエネルギーは重要なのだが、それをどう適切な行動にしたらよいのか分からない状態であろう。

C君を例に考えてみる。C君は#7のころ生活場面でも落ち着きがなくなった、体毛が生え出すなどの変化もあり、思春期の衝動の高まりも重なって起こったと考えられた。自分の中に生じたエネルギーをどう処理していくかはそれが身体的なものであれ、心理的なものであれ、大きな差はないだろう。#

7では体育館に入ってくるなり、奇声をあげていたり、ランニングでリーダーの邪魔をしたり、他の子にちょっかいをだしたり、馬鹿にしたりという行為は、過剰な衝動性エネルギーをどうしてよいか分からない状態と考えられる。その対処の仕方は、C君がしばらく前まで生活場面で見せていた不適切なやり方そのものであった。また、「毛布ロデオ」も今回C君だけ、身を任せる選択をしたが、そうになると興奮して、ふざけてコマネチポーズをし続ける。エネルギーが高まった状態のC君にとっては「毛布ロデオ」「セラピーボール乗り」という課題は、自分をコントロールできない、一種のパニック状態に陥らせるものなのだろう。

柏木(1987)も述べるように「自己を強く持つこと、外に向かって出すこと、他方、自己を抑えること、または自己を統制することとの二つが相反するものではなく、バランスを持って発達してゆく」のであり、今回のように子どもたちにエネルギーが充満してくると、その勢いを抑制できずに動いて、けがをする可能性が高まる。しかし、注意や、叱ることでその勢いを止めるのは即効性があるが、安心感をベースに生じてきたエネルギーをとめてしまうことになる。「のびのび」でいえば、いかに今度はそれをうまく使うことへつなげる運動課題を提示できるが重要となる。

個々人の身体の動きに焦点をあてるために始まった「のびのび」であったが、結果としてグループとしての視点を外すことができなかった。グループ全体の状態がどうなっているかを見極め、グループの状態を見て柔軟に運動課題を変えるなどの工夫も必要である。

3月で一応終了と考えていた「のびのび」だが、新学期に入って「次の『のびのび』、いつから始まるの?」と参加していた子ども達が聞いてくることが多く、子どもたちには職員が考えていたような最終回の意識はなく、継続するものだ、続くものだという意識があったようだ。まだグループ自体は途上であるのだろう。

## 結 論

### 自分の課題に自発的に取り組んでいくこと、退行と成長促進

グループの経過をまとめ、個々の子どもの成長、グループとしての成長についての考察を行ってきた。このグループが行った一番重要なことは、参加する子ども達にとって安心感につつまれた、一種退行的な方向と成長を促す方向がバランスを保った環境をつくりだしていくことにあった。集団で身体を動かす場面はできるできないが明確にあらわれる場面でもある。他人と争うのではなく、それぞれの子が楽しく身体を動かす中で、安心感を抱けたようである。

そのような安心感に支えられ、これまで生きてきた過程で十分に味わうことができなかった課題、自分の身体を味わう、相互作用のある環境で自分を試してみるなどに次第に向かい、乗り越えようとしていく。その過程を支えながら職員は必要と思われる課題を「こんなのやってみない?」とおずおずと提示していく。これが「のびのび」が行ってきたことの意味であろう。

この二方向のバランスを取ることは難しい。#3と#7はリーダーとして違和感があった回である。#3は個々の子ども達の課題が見えてきたことで、こちらの設定したメニューが課題に直面させるものが多すぎ、遊びの少ないものになったように思える。つまり、成長を促そうと無理をさせすぎたのだと思う。#7は子どもたちやグループに生じてきたエネルギーをこちらが理解できず、エネルギーに見合う課題ややり方を職員側が準備できなかったと考えられる。個々の子どもの成長とグループとしての成

長の双方に目配りをしていくことが重要である。

## 今後の課題

今後の課題として3点をあげておく。

一つには、今年に引き続いて、子どもの身体運動についての視点や、それに対する課題の設定、援助方法についての知識や理解を深めることである。今回は臨床動作法の視点に得るところが大きかったが、身体の動き・姿勢等を対象にした援助には様々なものがあり、それらも今後は視野に入れ、考えてみたい。

第2の課題は、今回の「のびのび」では個々の子どもの動きをよく見るために、集団としての動きを抑制した構造にした。にもかかわらず、最後には集団としての視点に向き合わざるをえなかった。来年も同様の構造で行う予定だが、グループの集団全体の発達についても注目し、可能であれば、そのグループの力動を治療的に利用することを目指すのが第2の課題である。

また、同種のテーマになるが、同じ運動課題を集団で行う際と個人で行う際との違いを考えてみたい。集団活動は刺激が強く、被虐待児にはその場にいること自体に困難をとまなう子が多い。しかし、今回の「のびのび」のように課題設定が適切で、集団の雰囲気がよくなれば、そこを基盤に成長を促進させる力は高くなる。今回の「のびのび」ではAさんとBさんの変化がもっとも目立ったが、この二人は集団活動に対する構えがある程度できていたように思う。

C君については、C君の動きに対する理解を担当職員に伝えたことで、担当と二人の時間の時に、相手をよく見て動くことをねらって、キャッチボールや、サッカーのパスを一緒にするなど、日常生活場面でも「のびのび」で発見された視点が応用されるようになった。集団にはまれない子ども達には、刺激が少ない一対一の方がよいのかもしれない。集団で行うのが適当な子どもなのか、一対一で行うのが適当な子どもなのかを、その子の動きの特徴によって判断できる視点が得られればと思う。

## 〈参考文献〉

四方耀子・増沢高「虐待された子ども・虐待した親への援助－重い被虐待児へのかかわりを中心に」『心理療法のできることできないこと』鍋田恭孝・福島哲夫編 日本評論社 1999

成瀬悟策『動作療法』誠信書房 2000

小口勝美 小林芳文 高山忠雄編『障害児のムーブメント教育－原理と指導の実際』フレーベル館 1981

小林芳文『運動・動作の指導内容と方法』学研 1993

柏木恵子『子どもの「自己」の発達』東京大学出版会 1983

葛西俊治「ボティワークにおける倫理をめぐって」『人間性心理学研究 20 - 2』 2002

増沢高 下木猛史 竹下洋子 岡部美穂「グループワークにおける治療的側面－グループワーク・トレーニングの変遷を通して－」『心理治療と治療教育 情緒障害児短期治療施設研究紀要 第4号』 1992

大野清志 村田茂編『動作法ハンドブック 初心者のための技法入門』慶応義塾大学出版会 1993

## 資料1

### 「のびのびグループ」で行ったメニューとそのねらい

メニュー名の前にある番号は「のびのびグループ」の中で行う順番を表している。ねらいについては当初想定していたものだけではなく、グループを進めるうちに新たに見えてきたものも列記してある。

#### ① 準備体操・ランニング

屈伸、伸脚、アキレス腱伸ばし。手首、足首、首などを柔らかくする。ランニングは体育館の中を5周。けがをしないよう体をあたためることが目的である。ランニングは競争にならないようにリーダーより前を走らないことがルール。

#### ② スティック体操（#1～4）

長さ80センチ程度のスティックを使って、自分の体を曲げたり伸ばしたりする運動。スティックを使うと何も持たない時に比べて、身体の筋肉が伸ばしやすく、動きが意識しやすい。自分の身体の動きを知るとともに、身体の動きの基礎としてしっかり立つことも目指した。

#### ② バランスボード（#5～7）

木の板の下に高さ2.5センチの半球状のゴムをつけ、前後左右に傾けることができるようにした。その上に乗ることで、不安定さを楽しみながら、自分の重心を傾け、傾けたままバランスをとって耐えることを目的とした。

#### ③ ローラーボード（#2）

4つの車輪のついた板の上に、座ったり、寝転がったりし、それを職員に押してもらい楽しむ。感覚を刺激することがねらいで、特にスピード感を味わってもらう。

#### ③ 毛布ゆらんこ（#1）・毛布ロデオ（#4～7）

毛布ゆらんこは、毛布の上に子どもが寝転がり、その両端を大人二人が持ち、ゆりかごのようにゆっくりとゆらす。感覚に刺激をあたえることや気持ちよく体をまかせることを目的としている。

毛布ロデオは、毛布の上に子どもが四つんばいになり、毛布の4つ端にいるスタッフがそれぞれ自由に揺らす。子どもはその揺れに負けないように耐える。楽しみつつ、自分から不安定な環境に耐えたり、環境に能動的に働きかけたりすることを目指す。

#### ④ サーキットトレーニング（#1～3）

サーキットトレーニングは平均台やマット、フラフープなどを使った簡単なアスレチックである。移動運動や手足の協応に焦点を当てている。

④ セラピーボール乗り（# 3～7）

子どもが直径1メートルぐらいのセラピーボールの上に乗り、それを職員が前後に転がす、子ども自身がバランスをとりながら静止する、などいくつかのバージョンがある。セラピーボールの柔らかい感覚を楽しむとともに、環境（ボール）と自分自身との相互作用を楽しみつつ、それをコントロールする構えを身につける。

⑤ クールダウン

体育座りをする。目をつぶる。簡単な整理体操をするなど。ねらいとしては、それまでのメニューで興奮した心と身体を落ち着け、日常生活に戻る準備をする。

おまけ スティックバランス

スティックを手のひらにのせ、それを落さないようにバランスをとる。バランス感覚を養うとともに、スティックと自分との相互の関係をコントロールしていく。

資料2

「のびのびグループ」一回ごとの子どもの動き

以下に1回ごとの活動内容と子どもの様子を表にしてまとめた。

#1 (5月)	Aさん	Bさん	C君	D君
参加の態度	非常に「いい子」でこの場にいる。何事にも一所懸命な感じ。全体的に動きがよい。	少し固い表情、担当の先生に髪の毛を結んでもらい、初めての人、初めての場所への防衛といった感じ。常にお尻がぽこっと突き出た姿勢でいる。	日常と変わらない感じで緊張は見られない。ビデオにピースするなど、ビデオを意識しているのが緊張かもしれない。	
準備体操・スティック体操 (上に伸ばして、左右に倒す。前後屈、ねじり)		後ろに体をそらせようとすると、そりきる寸前に、身体の軸をくにゃっと崩すか、耐えきれず後ろに倒れる。	身体はまっすぐ伸ばせるが、腕は曲がってしまう。	うまくつかえない。身体が倒れるまでねじってしまう。
毛布ゆらんこ (1回目 仰向け 2回目 あおむけからうつ伏せに動いてみる)	慣れている感じ。2回目の変化すばやくできる。	結んでもらった髪の毛が気になり、身体を固くしてゆだねることはできないが、〈気持ちよかった人〉には手を挙げる。	マット準備などお構いなく、マットに乗り、勝手にはね始める。「楽しい」と言うが、あお向けからうつ伏せへの変化は、うまく行かず暴れるだけになる。	興奮しケラケラ高笑い。「もっとはやく」と。2回目の変化はうまくできる。〈気持ちよかった人?〉には手を挙げる。
サーキットトレーニング (フラフープを10個程度置いて、その中をケン・ケン・パーで進む綱渡り 平均台かに歩き 肋木からマットへジャンプ)		途中で「あの人は(藤岡先生)は見ているだけなの?」と確認。平均台かに歩きはお尻が突き出た姿勢のためできない。〈カニさんだよ〉と声をかけると、手をカニのようにした途端、姿勢がよくなりうまくできる。ロープ渡りも練習の慎重な時より、本番でスピードがはやくなった時のほうがうまい。	カニさん歩き、勢いを調節できず、最後までわたりきれない。肋木はわざわざ高いところからジャンプしようとするが、ジャンプ自体は慎重。	幼児のようなぎこちない走り方が目立つ。ケン・ケン・パーではケン・ケンが同じ足で連続してできない。パーが両足そろわない。かに歩きできず、落ちる。全体的にできないこと多く、ごまかしてこなす。
クールダウン			静けさに耐えきれず笑いが止まらなくなり、D君と顔のはたきあいになる。	静けさに耐えきれず笑いが止まらなくなり、C君と顔のはたきあいになる。

#2 (6月)	Aさん	Bさん	C君	D君
<p>準備体操・スティック体操  (リーダーに合わせ、上前下に伸ばす。  ジャンプしてからしゃがみ、だんだん上に伸びる〈木のイメージ〉。  横に倒す  スティックに片足を乗せる。〈ケン・ケンへの布石〉)</p>	<p>屈伸や伸脚で後ろに転ぶ。  スティック体操では木が伸びるイメージを『トトロの木が伸びる場面』と想像し、うまくやる。</p>	<p>伸脚で後ろに倒れる。  スティック体操は「これ嫌い」と。職員が補助して身体を伸ばそうとするが補助しづらく、拒否される感じ。伸びきる寸前に膝をまげたり、身体のを軸を崩したりする。  身体感覚ははっきりしているようで、利き足での片足立ちでは「こっちは得意」「見て見て」と。</p>	<p>伸脚で転ぶ。  スティックをもつての伸びはすっきりできる。しっかり地面をつかんで身体を立ち上げていった。そのまま左右に曲げても軸はずれないで残っている。リーダーのところまできて「もっと伸ばして」と。</p>	<p>不参加</p>
<p>ローラーボード  (うつ伏せに乗り職員に押しってもらう×3回)</p>	<p>乗りなれている。止まりそうになるとボードを自分で動かす。</p>	<p>乗りなれている。止まりそうになるとボードを自分で動かす。</p>	<p>すぐに手でブレーキをかけてしまう。4つ足で進む。</p>	
<p>サーキットトレーニング  (ケン・ケン・パーフープを並べたその中をどちらの足も使うように〈D君に焦点をあてたメニュー〉)</p>			<p>平均台にまっすぐ向かっていき、派手に転ぶ。ローラーボードは紐をまったく無視し、力の調整ができない、する気がない。</p>	
<p>ローラーボード  (ロープで作った道に沿って〈コントロールの悪いC君に焦点をあてたメニュー〉  平均台～横歩き(カニ歩き)  〈前回のBのカニさんフィールドバックのためのメニュー〉  肋木～登ってぶら下がる(身体伸ばしとの関連メニュー)</p>				
<p>クールダウン</p>				

# 3 (7月)	Aさん	Bさん	C君	D君
準備体操・スティック体操 (ジャンプしてからしゃがみ、だんだんに伸びる(再び木のイメージ)伸びてから横に倒してみる 体を回してみる(旋回運動))	伸脚で後ろに転ぶ。 腰の入りが悪い。	肩があがり、腰が引けて、背中が前屈みになる姿勢目立つ。 (Gパターン) <sup>1</sup>	しっかり地面をつかんでいる。立ち上がり完璧。	スティック体操では一つ一つの動作の間隔が短い。止まる瞬間がない。身体を横に倒すとそのまま倒れてしまう。
セラピーボール乗り 1回目 (姿勢自由)補助の手を離し5秒耐える 2回目 うまくいかないで補助長めで5秒耐える	1回目座ってやる時は、じたばたと耐えようとするが、2回目で四つんばいになった時は、何もせずに落ちる。	2回目、補助があると手足を伸ばして飛行機の真似。のびのびすごく。	うまく乗った後、わざとゆさぶり、落ちる。課題に対して、あきらめているのかも。	一生懸命だが、じたばたしてしまい逆にそれが事態を悪化させる。 自分の時も、他人の時も笑いがとまらない。
スティックバランス	姿勢はいいが、スティックが傾き始めると、さっと逆の手でとってしまう。			一生懸命だが、じたばたしてしまい逆にそれが事態を悪化させる。 やはり笑いがとまらない。
サーキットトレーニングうさぎ組(テンポ良く軽快がテーマ) フープを使ってケン・ケン・パー テープで線路を作りそれに沿って歩く(だんだん広から狭く) 幅・高さ違い平均台(狭・高→広・低) 肋木(タンバリンをたたいてからジャンプして降りる)	軽快に動く。		フープの位置を見ていない。フープをとばしていく。	右足、左足の両方を使うように置いてあるフープ通りには動けず、全部利き足で無理矢理こなす。
サーキットトレーニングかめ組(ゆっくり確実にがテーマ) フープを使ってケン・ケン・パー(赤のフープは停止) ロープで作った道に沿って歩く 途中シャトルを拾いながら 幅・高さ違い平均台(広・低→狭・高)後ろ歩き 肋木登ってぶら下がる	前の人に追いつき始めると、気になるのか、失敗しがち。	ゆっくりケン・ケン・パー。乗れない。表情悪い。シャトル拾い「これ難しい」と。 後ろ平均台慎重にすり足で。	フープを見て、しっかり動ける。慎重にしっかりできる。	赤フープで止まれない。 後ろ平均台など、バランス崩した時リカバーがない。
クールダウン		ストレッチでも手を挙げると軸がずれる。		

# 4 (10月)	Aさん	Bさん	C君	D君
スティック体操 上に伸ばす(朝起きたときのイメージを使って) 横に曲げる 体を回す→重心移動を念頭に スティックを持って片膝立ち(腰入れ) スティックなしで体を前後左右に預ける(バランス)		前後左右に身体を預ける時には腰がしっかりしているが、身体を伸ばす時はくしゃんと崩れる。 スティックをもって身体を回す課題では、自分の前側でしか回せない。後ろはでっ尻の姿勢のせいで回らない。	きれいに伸びる。 身体の軸ずれない。	両手をまっすぐ上に伸ばせない。 アキレス腱のばしできない。 全然静止できない。 腰入れは、膝立ち自体が難しい。
毛布ロデオ ×2	1回目 左右にすぐ倒れてしまう。楽しくて笑いがでる。 2回目 がんばろうという気があるが、一度崩れてしまうとリカバリーがない。	人に任せつつ自分で持ちこたえるところが楽しそう。笑いながらも「くそっ、くそっ」とがんばる。	1回目 笑ってすぐ裏返しになる。 2回目は笑いも減り、しっかり耐える。	比較的うまく、毛布のゆれに身体を合わせる。
セラピーボール乗り(乗って静止してバランスを5秒間とる) 1回目 マットで両側をはさみ、前後のバランスをとる 2回目 マットなしでバランスをとる。	左右のついたてがない2回目も棒のようにまっすぐ乗る。(他の三人は足でボールをはさむように乗った。)	左右の感覚が薄いかまっすぐ乗れない。	身体や筋肉がしなやかでないのか固い。力が入っている。(怖い?) 左右の感覚が薄いかまっすぐ乗れない。 自分の思うバランス良い位置と実際のバランスがなりちがう。	まっすぐに乗っていたのに、ばたばたして逆に崩してしまう。 補助してもどこに乗ればバランスが良いのか分からない。
クールダウン		ストレッチ、座っていてもお尻でている。		

注1 「Gパターン」とはあご、肩、背中、腰、股、膝を屈曲させた姿勢のことをいう。横から見るとその姿勢がアルファベットのGに似ていることからその名がついている。新生児期の身体を丸めた胎児姿勢のような、全身的で非活性的な緊張が特徴であり、脳性麻痺の子どもには、Gパターンを崩せないで、かなり大きく成長した後も、身体を丸める緊張や姿勢パターンが残っている場合も多い。(大野 村田 1993)

#5 (1月)	Aさん	Bさん	C君	D君
準備体操+軽いランニング			なぜかスキップ。	アキレス腱のばしできない。まっすぐ伸ばせないで外側に崩れてしまう。 ランニングゆっくりだが5周ついて来られない。
バランスボード 前後左右に傾ける。回転、片足立ち等、その感覚を楽しむ	慎重		うまい。どうやっても倒れそうにない。後ろに傾いた時にも膝を使ってバランス取れる。	
輪っか飛び フラフープをベースに前後左右にジャンプ。		横に飛ぶ時、どうしても斜め後ろに飛んでしまう。		一所懸命だが慣性の法則にしたがい、右に飛べば、そのまま右に倒れてしまい、勢いに負ける。戻れない。
毛布ロデオ 今回は秒数を決め数回に分け立ち直す時間を入れながら	耐える気ないように感じられる。一度倒れると笑ってしまい、態勢を戻せない。	頭を毛布につけて前かがみ。工夫している。いつもの背中をそった姿勢ではない。自分のこの発見を皆に教えてあげる。	力を抜いて乗っており、うまい。真剣に取り組める。	毛布をつかんで耐えようとする。
セラピーボール乗り マットで両側をはさみ、前後のバランスに集中 1回目は職員が前後で補助して動かす 2回目は座ってバランスをとる。(ボールの空気が抜けており、簡単な課題)	動かないことで調整している。「腹に力を入れたほうがいい」と皆にアドバイス。	1回目まっすぐ乗れない。	1回目は、腕で引き寄せようと前後に動く、自分から働きかける。 2回目 一人だけ、10秒間乗ってられない。重心分らない。	C君のまねをしようとするが、ボールにお構いなく自分勝手に暴れて転ぶ。 2回目はじっとのれない。自分で勝手に課題をかえてしまう。
クールダウン				

# 6 (2月)	Aさん	Bさん	C君	D君
準備体操+軽いランニング	きれいな走りほう	姿勢よい。でっ尻目立たない。	遅い時はスキップで、速度を調整?	5周もたない。
バランスボード 前後左右に傾ける。回転、指示した方向に倒し静止、自由遊び	傾けて安定するまで時間がかかる。			やはり難しい。
毛布ロデオ 秒数(5秒、5秒、10秒)を決め3回に分け、立ち直る時間を入れて	ある職員の動きを見てそれに合わせる方法を考え出す。回を重ねるごとにコミットしている。	毛布つかむ。(前回のD君の方法)笑いながらもしっかり耐える。	毛布の動きに合わせて動く。(新しい工夫)	
セラピーボール乗り×2 ボールの空気は抜けたままで マットで両側をはさみ、前後のバランスに集中 職員がボールを前後に転がし移動する	やる前に職員とどうすればいいか考えていた。 乗るのは下手だが、うまく手をローリングさせて、進む。	課題に対して真剣。いちばんうまい。ローリングしながら進む。他の子がやっている間、マットの上で遊んでしまうが、注意は聞ける。	ボールの上でバランスを取ることからができない。 課題が難しくなってきたのか、集中できない。	前に進む時は担当職員がいたからか、飛びついていく遊びのようになってしまう。後ろに進む時は慎重に。 課題を課題通りに行うことができない。 想像の中ではスーパープレーをしているのかも。
クールダウン				
全体的様子				合間は崩れてしまうが、課題には真剣

#7 (3月)	Aさん	Bさん	C君	D君
参加への態度			来たとたんから奇声あげる。自分の位置なかなか定められない。	C君に影響され、奇声などまねをするが、声かけで戻る。
準備体操+軽いランニング			ランニングではわざとリーダーの邪魔をする。むらのある走り。	5周走りきれない。
バランスボード 前後左右に傾ける、指示した方向に倒し静止8秒どこもボードを床につけないで3秒以上	<膝をつかってごらん>という声かけにすんなりのることができる。	傾けて耐えた後、ボードなしで立ってもらおう。<足下しっかりしない?>に「ほんとだー」と。出っ尻はほとんど目立たなくなっている	安定して乗れる。	落ち着いて取り組めるが、時々派手に倒れる。
毛布ロデオ 秒数(5秒・10秒・10秒)を決め3回に分け立ち直る時間を入れながら3回目は毛布ゆらんこを選ぶのもOK		最初は毛布をつかんでいたが、ゆれが激しくなると、それに合わせて、トランポリンのように飛ぶ	3回目は「毛布ゆらんこ」をえらぶが、コマネチのまねでふざけてしまう。楽しすぎる?	地藏のように耐える。最後は毛布の揺れに合わせて自分で飛んでみる。
セラピーボール乗り 今回はボールの空気を少し入れてみた マットで両側をはさみ前後に職員が補助に付き子どもがバランスを取りつつ転がりながら進む(1往復)	すぐ落ちるが、笑顔でやりなおす。 自然な身のこなし。	横向きに乗る、そのままうまく動く、<縦にのってみて?>には「難しいこというね」と言いつつ、しっかり取り組める。なおかつ上手。	身体が大きくなり、ボールが小さいのか乗りにくい。足でマットを押さえているなど、課題に対してごまかしが目立つ。途中で他の子が課題にとりくんでいるのにちょっかいを出しそうになる。注意される。	
クールダウン				